
夢渡り

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢渡り

【Nコード】

N1661M

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

主人公大沢裕司に現世と異世界を行き来する特異体質が顕れたのは十五歳になった夜からだった。それは夢渡りと呼ばれるものだった。今、裕司の冒険が始まる。

第2話

「ドルマスク？ いえ違いますけど……」

「なんだ……子供か……不意打ちにあつた……俺の命はここまでのようだ……少年、一つ頼みがある……んだが」

「何ですか？」

「……このカードを君に譲る……」

裕司に渡されたのは四枚のカードだった。

「これはなんですか？」

「はあはあ……そんなことも知らないのか……これはカードといって……ケホッ……そのカードを掲げカード名を叫べばモンスターを操ったり、超常現象を起こしたり、魔法が使えるんだ……」

裕司は渡されたカードを見た。

『火龍』

『神雷（無限）』

『絶対防御（無限）』

『神鳥の卵』

「神鳥の卵を神の祭壇まで持って行ってくれないか……」
「それは、どこにあるんですか？」

そう裕司が尋ねると同時に、怪我をしていた青年にナイフが額に突き刺さって、青年は死んだ。

「誰だ!？」

}
u
u
u
<
{

第3話

「誰って言われてもね……ドルマスクの殺し屋ネルよ」

青年を殺したネルは銀髪で青い瞳を持ち、とてもグラマーな美人女性だった。

それともう一人男がいた。その男はかなり痩せていて身長はすらっと高かった。男は言った。

「……ビンゴだ」

ネルは言った。

「あなた、その死体の彼から『神鳥の卵』ってカードを渡されなかった？」

「さあね」

「生意気なガキね。殺してあげるわ」

ネルは一枚のカードを掲げ言った。

「追尾ナイフ！ ガキも死にな」

グラマーなネルの頭上から一本のナイフが顕れ裕司に向かって飛んで行った。スピードはかなり速い。

裕司はナイフが刺さる寸前に頭上に一枚のカードを掲げ言った。
「絶対防御！」

裕司に刺さると思われたナイフは裕司が作り出した裕司を囲む円形の膜に弾かれた。

っつづく

第4話

それに美人なネルは驚きの声をあげた。

「絶対防御ってSSSランクのレアカードじゃない！　なんでそんなカードを！？」

「貰った。ならこれでどうだ……」

裕司は別のカードを掲げ言った。

「神雷！」

裕司の声とともに晴れ渡っていた空に暗雲が立ち込め。ネルに向かって幾筋もの雷が降り注いだ。

「ギャー！！！」

ネルは降り注ぐ雷に何度も打たれ。黒い炭になってしまった。しかしビンゴの姿はきえていた。

裕司は青年とネル二人の墓を作り遺体を埋葬した。

「さてと街でも探すかな」

裕司は歩き出した。しばらく南に進んだ裕司の目に小さな村落が目に入った。

「よし、情報収集出来るぞ」

{くっく}

第5話

村の入口には屈強そうな男が槍を片手に立っていた。

「あの聞きたいんですが？」

「なんだ？」

「ここはどこなのでしょう？」

「アルデリア大陸のフープ村だ」

「アルデリア大陸……ありがとうございます」

裕司は村の探索に出かけた。

村には物知りの村長がいるということで村長宅に裕司は立ち寄っていた。

ここは村長宅内。向かい合った椅子に村長と裕司は座り話していた。

「夜寝たらこつちの世界にいたんですけど何かわかりませんか？」

村長は立派な顎髭を摩りながら話した。

「それは、この世界では夢渡りと呼ばれるものじゃ」

「つつく」

第6話

「夢渡り？」

「さよう、眠ると異世界を行き来出来るもの達のことじゃ。わりといることにはいる」

「元の世界に帰る方法がありますか？」

「こちらの世界で眠れば帰れる」

「なるほど、じゃあ神の祭壇の場所は分かりますか？」

「ここフープ村より東のはてにあると聞いたことがある」

「じゃあこのカードについて何か知りませんか？」

裕司は『神鳥の卵』のカードを村長に差し出した。

「なんと！？ おぬしどこでこのカードを手に入れたのじゃ！？」

「今は生きていない人からです。このカードは一体何なんですか？」

「このカードはこの世界にとってたいへん貴重なものじゃよ。毎年この卵のカードを神鳥の祭壇に持っていき、神鳥を復活させるのじゃ。神鳥は平和の象徴。毎年神鳥の一族が神鳥を復活させていたはずじゃ。この世に平和をもたらしてくれる」

村長の家をあとにした裕司はとりあえず大冒険の目的地を神鳥の祭壇に決めた。しかしまずは資金稼ぎをしないとパジャマのまま冒険に出ることになってしまう。

そこで裕司がやって来たのは村にあったギルドだった。中に入ると屈強そうな男達で溢れていた。

「つづく」

第7話

仕事の依頼書が貼ってある掲示板を目にした。

「ドラゴン退治に、馬車の護衛、ゴブリンの撃滅……よし、一獲千金狙いでドラゴン退治にしよう」

ざわつくギルド。

「あんなやつにドラゴン退治だなんて無理だろ」

「調子のとてんじゃないか」

「俺が懲らしめてやるか。おい、変な服の小僧！ 現実をみせてやるから表に出な」

鉄の鎧を着たマッチョな男はそういって裕司の手を引っ張りギルドの前の通りまで来た。

とりまき達が見守るなかマッチョは言った。

「俺はブンコ様だ。一回だけチャンスをやろう。好きに攻撃してこいよ」

「いいんですか？」

「ああ、もちろんだ」

裕司はカード掲げ言った。

「弱めの神雷！」

空高くから落ちた雷がマッチョにぶつかった。倒れるマッチョ。動く様子がないことから気を失ってしまったようだ。

}つづく{

第8話

「流石にドラゴンは強いな。神雷！」

五回の神雷で森に住むドラゴンに重傷を負わせた裕司。その裕司をドラゴンの火炎のプレスが襲う。

「絶対防御！」

裕司の周りに膜が出来、裕司を火炎から守る。

「神雷！ 神雷！」

二連続の神雷のダメージについにドラゴンをしとめた。裕司はドラゴンの剥がれた鱗を一枚とり、帰路についた。

今は夜。フープ村のギルドでドラゴン退治の換金を済ませ宿屋のベットで横になる裕司。カードやお金は夢渡りのためにある預かり所へ預けて来た。また、次回のこつちの世界に来る場所を預かり所のセーブポイントにしてきた。

「眠い……これでひとまず現実の世界へ帰れるのか……」

{}つづく{

第9話

「りりりりりん!」

横長なデジタルの目覚まし時計が揺れながら鳴った。

「うん?」

裕司は目覚まし時計に目をやると八時になっていた。どうやら異世界の疲れがでたようだ。裕司は慌ててベットをでると服を大急ぎで着替え、二階の自室を出て階段を下りる。

「やべ、遅刻する!」

階段下には裕司の母の佐和子が立っていた。佐和子は言った。

「裕司ご飯は?」

「いい、遅刻するから」

裕司は学生服のボタンをとめながら靴を履き家の外へととび出した。

{ つづく }

第10話

なんとか遅刻しないで学校にたどり着いた裕司は窓際の自分の席で窓の外から吹き込む風としたじきで扇いだ風で体温を下げていた。
「暑いー」

裕司がぐったりしていると前の席の目鼻立ちが整いスレンダーな愛川美砂あいかわみさが振り向き小さな声で話しかけてきた。

「裕司も夢渡りだったんだね」

「……」

驚いた裕司はしたじきで扇ぐ手が止まった。

「な、なんで知ってるんだ」

「フープ村のギルドで絡まれてるあなたを見たの」

「じゃあ美砂も夢渡りなの？」

「うん、そうよ」

「へーそうなんだ」

「ねえ、私達でパーティーをくまない？」

「パーティー？」

「うん。どう？」

「いいよ、今晚はどこで待ち合わせする？」

「フープ村のギルド前でどうかしら？」

「分かった」

「つつく」

第11話

ここはフープ村のギルド前。そこにスレンダーな美少女が立っていた。鉄の胸当てを装備している。時々辺りを見回している。

「おい、姉ちゃん暇なら俺と遊んでくれないか？」

美少女が声の方を見ると筋肉質な背の高い厳つい男が立っていた。

美少女は透き通る声で言った。

「待ち合わせしてるのですみません」

「そんな、つれないこと言っなよ」

ねばる厳つい男の肩に誰かが手を置いた。厳つい男は言った。

「うっとうしいな、誰だ？」

「そいつ、俺の連れなんだ」

{ つづく }

第12話

裕司は言った。

「お前はウンコ！」

敵つい男は振り返り怒った。

「ブンコだ！　ってお前はあの時の雷使い」

「またやられたいのか？」

カードを出す裕司。それを見て一目散に逃げ出すブンコ。

「ひいひい！」

裕司は美少女に近づき謝った。

「美砂、遅れてごめん。中々寝付けなくて……」

「いいわよ、それよりあなたの服どうにかしないとね」

裕司は自身が着るパジャマに目をやった。

「前は忙しかったからね。服屋に行こう。ドラゴン倒したから金貨が二十枚あるしね」

「つつく」

第13話

「ここはフープ村の服屋。お客さんが疎らにいて割と広い造りだ。これなんてどうかしら?」

美砂が見せて来た服は真っ赤に染め上げた服だった。

「俺、赤い服嫌いなんだ」

「じゃあ、これ？」

次に美砂が見せてきたのは青い服だ。

「それにしよう」

それからズボンや靴下、青い服を買い、着た裕司は靴屋によって頑丈な靴も買い、履いた。

「防具屋と武器屋はどうする？」

美砂の問いに裕司は答える。

「行く」

街中を美砂と二人で歩きながらまず武器屋を目指した。

つづく

第14話

ついに武器屋の建物が見えて来た。剣の絵が描かれた看板が建物にぶら下がっている。

「美砂あそこが武器屋か？」

「そうよ」

武器屋の中は短剣や斧、銃等様々な武器が置かれていた。

「この剣かっこいい」

裕司達が武器を見て一人の体格の良い男が近づいて来た。そして言った。

「お前がネルを殺した男か？」

男の表情は憎しみに満ちていた。片手に裕司の似顔絵が書かれた紙が握られている。

「自己防衛だったんだ。それに威力があんなにあるなんて知らなくて……」

「うるさい、言い訳は聞きたくない！俺はビスタチオだ。俺と勝負をしろ！」

}つづく{

第15話

ここは武器屋近くの広場。昼間だけあって疎らに人がいる。けっこう広い。

「準備はいいか小僧？」

装備を買う暇を与えられた裕司は鋼の剣と鋼の鎧に鋼の兜を購入し、装備していた。

「いいぞ」

「俺は神速のビスタチオ。お前も名乗れ」

「俺は裕司だ」

「ではいくぞ、裕司！」

ビスタチオはカードを掲げ言った。

「神速！」

裕司も言った。

「弱めの神雷」

晴れ渡っていた空が曇りビスタチオに向かって雷が落ちた。しかし、両手にダガーを掲げたビスタチオは裕司の目にも留まらぬ速さで動いた。落ちてくる雷を難無くかわし裕司に詰め寄り切り掛かった。

「絶対防御！」

裕司に届かんとしたダガーが裕司の周りに張られた膜に弾かれた。

「これが話しに聞いていた絶対防御か……ならこうだ！」

ビスタチオは弾かれても何度も何度も切り付けた。しかし、膜を破ることは出来なかった。

（ビスタチオには神雷は当たらない。こうなったら……）

ぷっく

第16話

裕司は火の龍が描かれたカードを掲げといった。

「火龍！」

するとカードから火でできた長い龍が姿を顕した。龍は言った。

『我を呼び出したのはお前か、小僧』

「そつだ、だから命令を聞け、やつを捕えてくれ」

『その褒美に何を我にくれる』

裕司は右手を天高く上げ言った。

「右腕、一本！」

『クハハハ、気に入ったぞ小僧。お前の命令をきいてやろう』

火龍は凄まじいスピードでビスタチオに迫った。かわそうとするビスタチオだったが火龍の方が素早さで勝った。ビスタチオに巻き付く火龍。

「く、くそ……」

火龍に巻き付かれたビスタチオは暴れるが無駄な抵抗だった。

裕司は雷が描き記されたカードを掲げ言った。

「弱めの神雷」

小さな雷がビスタチオに落ちた。痺れるビスタチオ。

火龍は言った。

『小僧、こやつを殺さないのか？　こやつはお前を殺そうとしたのだぞ？』

「殺さない……」

}つづく{

第17話

『また襲われたらどうする?』

俯きかげんだった裕司は顔を上げ言った。

「その時は何度だって受けてたつよ」

『クハハハ、面白いガキだ……気に入ったぞ。お前からの褒美は貰わんことにしてやろう』

するとビスタチオに巻き付いていた火龍は姿を消した。裕司の持っていた白紙のカードに火龍の絵柄が顕れた。地面に落ちるビスタチオ。雷のせいか手足が痙攣している。

ビスタチオは仰向けで言った。

「俺を今殺しておかないと後悔するぞ……ネルの仇だ……どこまででも追いかけてやる」

「いつでも受けてたつよ」

仰向けのビスタチオを残し、裕司は美砂と連れだって広場をあとにした。

ふっつく

第18話

ここは、フープ村の東に位置する草原。そこを一台の馬車が風をきって走っていた。中には裕司と美砂が向き合って座っていた。

「裕司、神の祭壇に向かうのよね」

「うん、ある人に頼まれたんだ」

馬車が地面の凹凸や石を踏んでガタガタ揺れる。

「美砂は行く所とかなかったの？」

「うん、今んとこないよ。そうだ、神鳥の卵のカード見せてよ」

「いいよ、はい」

美砂は神鳥のカードを受け取ると入念に見ていた。

「ただの大きな卵だね。このカードを祭壇に持っていくとどうなるの？」

「神鳥が復活するらしいよ」

{}つづく{}

第19話

「お客さん、ルミア国に着きましたぜ」

馬車がルミア国内に止まった。裕司達は馬車を降りた。

「ここがルミア国か」

「広いわね」

たくさんの人達が往来している。人の多さに酔いそうだ。

「さすが大国、人が多いな」

「この国にはコロシウムがあるらしいわ。勝者には褒美が貰えるそうよ。出てみない？」

「確かにまだお金はあるけど念のため稼いでおこうか」

ここは天井のない円形のコロシウム。大勢の観客がいる。

手続きを済ませた裕司と美砂は三人の武装した男達と相對していた。

美砂は裕司の手を握った。

「え、なに？」

（ちょっとドキドキした）

「カードの効果範囲を広げるためよ」

「なんだあー」

美砂がカードを掲げ言った。

「有利な霧」

コロシウム内を包み込む霧が美砂のカードから顕れた。対戦相手は動揺している。

「つつく」

第20話

裕司は不思議なことに気付いた。

「美砂、霧があるけどいつも通り見えるんですけど……」

「それはそうよ、そういう効果なんだから」

「これチャンスじゃん。」

「裕司やっちゃえ！」

「おう」

霧で涼しくなったコロシウム内。裕司はカード掲げて言った。

「弱めの神雷」

空に曇天が顕れ小さな雷が三人の男達を正確に撃ち抜いた。

バタバタ倒れる三人。霧が晴れたコロシウム内で立っていたのは裕司と美砂だった。

倒れた三人の男達を見たジャッジが言った。

「勝者は裕司と美砂！」

{つづく}

第21話

今は空を闇が支配する夜だ。

そしてここはルミア国の宿屋。とても立派な外観としっかりした造りの大きな宿屋だ。

武器やカード等をこの国の預かり所に預け預かり所のセーブポイントにセーブ（次回こっちの世界に来る際の出現場所）してきた。裕司と美砂はパジャマ姿で宿屋の三階にいた。

「裕司、お休み」

「おう、お休み」

「また、現世でね」

「うん、じゃあね」

二人は三階の別々の部屋に入っていた。

裕司は部屋に入ると立派なベットに腰掛けた。部屋の造りもたいへん良い。

「はあ、今日は疲れたなあ」

裕司はランプの火を吹き消してベットに入った。

ふっづく

第22話

ここは裕司が通う中学校内。今は午前十一時、数学の授業中。今日は天気が良くぽかぽかと温かい。

そんななか裕司は教科書を机に立てて起きその後ろに顔を隠しながらもぐもぐと早弁をしていた。

（ミートボールうま！ おにぎりの中身は鮭か！）

女教師川合皐月かわいさつきは言った。

「大沢裕司くん、授業中に早弁は止めなさい！」

「！！ なんとえわがったんですか？」

「そんだけガツガツ食べてれば誰にでも分かります！」

教室の他の生徒達は笑っていた。

授業が終わり下校の時間になった。部活をしていない裕司は帰ろうとしていた。

すると前の席から声がかかった。

「ちょっと待って一緒に帰りましょ」

美砂だった。

「分かった」

二人一緒に歩いて寂れた商店街を通って行く。どこもかしこもシヤッターが下りている。

「今晚はどこで待ち合わせる？」

「ルミア国の宿屋前でいいんじゃない」

「分かったわ」

「つつづく」

第23話

地面の凹凸で揺れる馬車。その中に次の目的地サルビア共和国を目指す裕司と美砂の姿があった。

「次の東の国はサルビア共和国ね」

「そうだね」

「その馬車待った！」

馬車のいくてを阻むのは三人の馬に乗った男達だ。三人共ガッツリした体格をしていて鎧に兜をし斧を持っていた。

ただならぬ雰囲気、裕司と美砂は馬車を降りた。

「降りてきたか金めのものは置いていきな」
土埃が舞う荒野。

裕司は声の主を見て言った。

「お前は排泄物、いや違った。ウンコだな！」

「違うわ！ ブンコだ。げっ！ お前は雷使い、これはいかん。野郎ども撤退だ！」

「え、ただのガキ二人ですよ」

「馬鹿やろっ、撤退だ！」

$\{ \prec \cup \cup \}$

第24話

ここは、ルミア国を東に行った所にあるサルビア共和国。

人で賑わう露店を横目に裕司と美砂は歩いていた。

美砂が宝石商の露店で足を止めた。サファイアの指輪や真珠のネックレス等が並んでいた。美砂は言った。

「あ、この指輪かわいい」

店員は言った。

「お客さんはお目がたかい。その指輪は身につけている人のケガを治す効果があります」

「買うことに決めたわ」

「ありがとうございます」

早速青い宝石をあしらった指輪を右手の人差し指にはめる美砂。他にも食べ物や売っている露店やカード屋や武器や防具を売っている店があった。

ふっふっく

第25話

裕司と美砂はサルビア共和国で馬を借り、目的地である神の祭壇に向かっていた。

馬の振動に堪えながら二時間駆けた場所に目的地はあった。

「ここか……」

裕司は馬の上から呟いた。清涼感のある風が馬上の二人に吹き付けた。

裕司達の視線の先には古い石造りの大きな建物があった。

裕司と美砂は馬の紐を近くの木にくくると祭壇にむけ歩き出した。

「待ってたぜ」

裕司達が声の方を見ると立派な体格のビスタチオが立っていた。

「ここから先は行き止まりだぜ。神速！」

するとビスタチオは大型の剣で裕司に切り掛かってきた。

裕司はカードを掲げ言った。

「絶対防御！」

しかし、裕司を守る円形の膜をビスタチオの剣は破った。そして

裕司の鎧を削りとった。

「な、なんで？」

裕司と距離をとった体格の良いビスタチオは言った。

「この剣が魔法殺しの力を持っているからさ。次で決めるぜ！」

美砂は裕司の手をとるとカードを掲げ言った。

「有利な霧！」

すると辺り一面に霧がたちこめた。

「ちょこざいな！」

怒るビスタチオ。美砂は裕司の手を引っ張り神の祭壇の扉を開き中に入った。そして鉄の扉を木の錠で鍵をした。

「裕司、大丈夫？」

「ちょっと切られたね」

裕司の鎧の隙間からおびただしい血が溢れていた。

「裕司、この指輪をつけて」

美砂は右手の人差し指から指輪を外すと裕司の左手の真ん中の指に指輪をはめた。すると裕司の出血が止まった。

「神鳥を復活させないと」

そういうと裕司は立ち上がり、祭壇の台座の前まで歩いていき力
ードを掲げ言った。

「神鳥の卵」

すると台座の上にニメートルはあろうかという卵が台座に顕れた。
卵は揺れだし殻がちよつとずつ剥がれ始めた。そして神鳥の雛が姿
を現した。雛は凄まじい成長を見せ七色に輝く巨大な鳥へと姿を変
えた。

その時祭壇の入口が切り壊された。ビスタチオだった。

「くそ、神鳥の復活を阻止出来なかったか。ならせめて裕司の命だ
けでももらおう！」

かなり速いスピードで裕司に近づき切りかかるビスタチオ。

『やめなさい！』

神鳥の声と共にビスタチオの周りを赤い光が包んだ。そして一際
赤く輝くとビスタチオの姿は消えていた。

『彼はフープ村に行ってもらいました。裕司さんよく私を復活させ
てくれました』

「いやー」

『これで今年は平和が続くでしょう。ありがとうございます』

「いえ、そんな」

{くっく}

第26話

神鳥と別れた裕司と美砂はサルビア共和国の預かり所まで来ていた。

中は受け付けの男の人が二人いた。そして頑丈そうで大きな金庫が受け付けの後ろにあった。

荷物を預けパジャマ姿になった裕司と美砂は地球儀に似た青い玉のセーブポイントに手を触れセーブ（次回、異世界にくる場所がここになる）していた。

「裕司、目的を果たしちゃったけど次はどうする」

「まだ何も決めてないよ」

夜道を裕司と美砂は歩く。二つの黄金色の月が空にあった。冷たい風が吹いている。そして、宿屋にたどり着いた。

「美砂、お休み」

「ええ、お休み」

二人はベットで眠りについた。

{おしまい}

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1661m/>

夢渡り

2010年10月10日00時30分発行